

かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しようらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらずじ〕 暦応元年（二三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。直義らは兜を宝蔵に納めに行き、後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。翌日、桃井家の奥座敷。若狭之助は、本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

〔殿中刃傷の段〕 「おのれ師直、真二つ」と意気こむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかった。その後、判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今和歌集の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であった。

殿中刃傷の段

脇能過ぎて御樂屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌なゝめならざりける。若狭助はかねて待つ師直遅しと御殿の内、奥をうかがうふ長袴の紐しめくゝり気配りし、

『おのれ師直、真二つ』

と刀の鯉息をつめ、待つとも知らぬ師直主従遠見に見付け

「これは／＼若狭助殿。てさてお早い御登城。イヤハヤ我折りました。我ら閉口々々。いや閉口ついでに貴殿に言訳いたし、お詫び申すことがある」

と、両腰ぐはらりと投げ出し

「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。いつぞや鶴が岡で拙者が申した過言、ヲ、お腹が立つたであらう。

もつともぢや／＼、がそこをお詫び。その時はどうやら

した詞の違ひでつい申した、我れら一生の粗忽。武士が

コレ手をさげる。真平／＼。仮令かりようそのもとが物馴れたお

人なりやこそ、外ほかの狼狽者で見さつしやれ、この師

直真二つ、こわやの／＼。ありやうがこの節貴殿のうし

ろ影手を合わして拝みました。アハ、。ア、年寄ると

やくたい／＼。年に免じて御免々々。これさ／＼武士が

刀を投げ出し手を合はす。これほどに申すのを聞き入

れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも誤り／＼。コレ

サ珍才ともどもにお詫び／＼」

と、金が言はする追従とは夢にも知らぬ若狭助。力みし

腕も拍子抜け。いまさら抜くに抜かれもせず。寝刃合は

せし刀の手前、さしうつむきし思案顔。小柴の蔭には本

蔵が瞬きもせず守り居る。

「ナニ珍才、この塩谷はなぜ遅い。若狭助殿とはきつい

違ひ。扱々不行儀者。いまにおいて面出しせぬ。主が主
なれば家老で候とて諸事に細心のつく奴が一人もない。
いざ〜若狭殿、御前へお供いたそ。サアお立ちなされ
〜。いやさこれ師直めあやまつてをるぞ。コリヤこ、
な粹め〜粹様め」

「イヤ若狭助最前からちと心悪うござる。マア先へ」

「何とした〜、腹痛か。コレサ珍才、お背中〜。お
葉進ぜうかな」

「イヤ〜それほどにもござらぬ」

「然らば少しの内おくつろぎ。御前の首尾は我れらが
よいやうに申し上ぐる。ソレ珍才一間へ御供申せ」

と、主従寄つてお手車に、迷惑ながら若狭助『これは』
と思へど、是非なくも奥の一間へ入りければ

「ア、もう樂ぢや」

と本蔵は天を拝し、お次の間にぞ控へ居る。ほどもあら

さず塩谷判官。御前へ通る長廊下。師直呼びかけ

「遅し〜。なんと心得てござる。今日は正七ツ時と先
刻から申し渡したでないか」

「なるほど遅なはりしは不調法。さりながら御前へ出
るはまだ間もあらん」

と、袂より文箱取り出し

「最前手前の家来が貴公へお渡し申しくれよ、すなは
ち奥顔世方より参りし」

と、渡せば、受取り

「成程々々。イヤそこもとの御内方は扱々心がけがご
さるわ。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼
むとある。定めてそのことならん」

と押しひらき

「さなきだに重きが上の小夜衣、わがつまならぬつま
な重ねそ。ハアこれは新古今の歌。この古歌に添削とは

ム、ム、ム、

と思案の内

『わが恋のかなはぬしるし。さては夫に打ち明けし』

と思ふ怒りをさあらぬ顔

「判官殿、この歌ご覧じたでござらう」

「イヤたゞいま見ました」

「ム、手前が読むのを、ア、貴殿の奥方はきつい貞女

でござる。ちよつと遣はさるゝ歌がこれぢや。つまなら

ぬつまな重ねそ。ア、貞女々々。そこもとはあやかり者

登城も遅なはる筈のこと。家にばかりへばりついてご

ざるによつて、御前の方はお構ひないぢや」

と、あてこする雑言過言。あちらの喧嘩の門違ひとは判

官さらに合点ゆかず、むつとせしが押し鎮め

「ハ、ハ、ハ、これは、師直殿には御酒機嫌か、御酒

参つたの」

「いつ盛らしやつた。イヤいつ呑みました。御酒下され

ても呑まいでも勤むるところはきつと勤むる。貴公は

なぜ遅かつたの。御酒参つたか。イヤサ内にへばりつい

でござつたか。貴殿より若狭助殿ア、格別勤められま

す。イヤまたそのものと奥方は貞女といひ御器量と申

し、手跡は見事。御自慢なされ。むつとされな、嘘では

ないはさ。今日御前にはお取込み。手前とても同然。そ

の中へ鼻毛らしい、イヤこれは手前が奥で歌でござる

などと。それほど内が大切なら御出御無用。総体貴様の

やうな、内にばかり居る者を井戸の鮎みなぢやといふ譬たとへ

がある。後学のため聞いておかつせ。かの鮎みなめがわづか

三尺か四尺の井の中を、天にも地にもないやうに思ふ

て、ふだん外を見る事がない。ところにかの井戸替へに

釣瓶について上ります。それを川へ放ちやると、なにが

内にばかり居る奴ぢやによつて喜んで途を失ひ、あち

らへはうろく、こちらへはうろく、しまいには橋杭

で鼻をうつてぴりくくくと死にます。かの鮒めが。

貴様も丁度その鮒と同じことだ。鮒よ鮒よ、鮒だく、

鮒武士だ」

「フウム」

「殿中だ」

「ハアくくく」

「ハハハハハ」

と出放題。判官腹に据えかね

「こりやこなた狂気召さつたか。イヤ気がちがふたか

師直」

「シヤこいつ武士をとらへて気違ひとは。出頭第一の

高師直」

「ム、すりや今の悪言は本性よな」

「くどいく、ガまた本性ならどうする」

「ム、オ、かうする」

と抜討ちに真向に切りつける眉間の大傷。『これは』と

沈む身のかはし、烏帽子の頭二つに切り、また切りかゝ

るを抜けつくぐりつ逃げ廻る折もあれ、お次に控へし

本蔵走り出て押しとどめ

「コレ判官様御短慮」

と抱きとむるその隙に、師直は館をさしてこけつ転び

つ逃げ行けば

「おのれ師直真二つ。放せ本蔵放しやれ」

と、せり合ふ内、館も俄に騒ぎ出し、家中の諸武士、大

名小名押さへて刀もぎとるやら。師直を介抱やら、上を

下へと

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。